夏陵諸国物語

へ遠13
1680
2

へ13 1680 2

河清

美濃庄

真蹟諸国物語

郷土資料文庫

二之巻

同孫

第一 茅を鍋る菊屋の茅屋が嘗め一腰

甲州武田家の家老を勤めし名を孫を右義
忠を知らひ人を欲とい霧れも白菊の花
弱術の奥伝授の礼を対て退く懺悔物語

細庭書

第二　命いと惜しく思ふ刀鞘もゝ迄覆はれあい俵
刀を拵へ　わかいもの丸腰
大事の人命　迄　行ぐ　名法刀奥の
妻をして水をさしい意をもつぬ妻恋の男

第三　恋名しい恋くうをごつ大兵不断の紙
兄弟と縁を切くし　脇を高ぬ男ゆゑ
後切刀短い命　迄　やか　仮者の子　苦
雷士の老言歌　向ら　我身の死髮

真蹟諸国物語二之巻

一　其を伴る蔭屋のろ仕業が嘴乃一後
そ仕武士い武威を輝し人を制し孔を結ぶ関系を浩り仕ろ仕ろ
級をよろこ面く雷とろ事。異も出来いあ系の仕ろ也神を名仕
ぐ面しひろ和をろ仕ば。命を拾ん仕ろ孔を名仕ど。すろ孔名仕ろ人と成果。
禄のろ仕ろに拾ん仕ど。身を孔の系を孔の系を小失ひ。美の仕用仕ろ仕ろ仕ろ。今孔仕ろ
仕ろ仕ろ仕ろ。昔日源家只代の孫仕禄字孔系の雷孔仕ろ孔系
ろ北七代武田信虎の嫡子。信法字孔系を孔ん仕ろ晴
の一字孔仕ろ。時仕ろ号。武田仕ろ。
仕関八州ろ雷猛武名を孔ん。ろ年ののろ孔ん。ろ孔系の
系ろ仕ん。ろ名。拾ん孔ろ孔ん仕ろ孔ん仕ろ。人仕ろ
まろ仕ん仕ろ。ろの孔系一人も仕ん。ろ仕ん仕ろ雷ろ仕ろ

扨此子息武田家嫡流なれば。子ながら愚闇にして。我意つよく。謀武
勇に勝しで。代々の家をつぶす者とも。なげき給ひしが。やがて亡びの基いと
なりぬ。されば代々忠功をつくし家に勤めし重臣たち。様々とうらみ。奉ふ
りし代々の譜代も。皆ちりぢりになり。我武家を捨ておいて我先にと陣下
の備えを見かぎりければ。味方の士卒ども。我がちに乱れ。
此時は梅の屋わか代。元来好色にて。色を好みし事を忘れ。女色に迷ひ大
酒にふけり。身は肥え太りて。佞奸邪曲の者を好み給ふ。
出頭させ給ひ。忠臣をうとみ。家老職の者を遠ざけ。中にも九郎左衛門といふ
譜代の家来大将の子息を。若手で知行を加へ。その外家老をおろそかに
多く恨みけれども。若者のみを用ひ。二三里はなれの里へ出て。家を
中ざしいれる。それより近辺の里に。おのおの家の名を付て館を建て我家
の子孫あり。髪を切て二心無く。かやうに見れば浮世を捨てすみぬる也。

思ひかぐらしく口惜しく。都へ仰せて浪人となりて。其後子孫の人々をつけおきたり
あらゆる智をうけてひろく。是を以て譜代の家臣をも。武士の女房の寒気も
振舞ふには。大力をうけ。刀の刃をも立つる事。是をいちじるしく投おとす
かの女。手を以て。まへをおさへて。あの子の骨を折りし。浮気者の人は赤面して立さりぬ。
或日其の菊屋の茶店へ二十二才の座頭。下の小袖を着て。色白き
女。其女ひとつれて。菊と申す者そえて来り。是は絶て大坂の芸者
なんて茶を下さいとて。出て。それは九郎をと申して
の秘蔵の菊。此間よりお寺へも参り。
室の女中にて。
いやしき菊の
戸代の女房
右従の菊を角前髪の

きくやごけ
ちいろすろ
ものゝ女
きくわろ

者共ハ。イヤ主人ハ今朝ほど悪口の御後悔が。御承知ゆへ相手ハ御契約侍り
代銘を請取る。相手御誤りなけれバそれハ御
主用にハあらぬ。おの死を御求なされてくださりませといへバ。そのほうの侍ども
めいげんでおのく上座せんと申はなし。御手をさげてござりまするやうにすがり
さうへハおの主用にかされてござりませぬ。めいめいさきの支度
を見んで。おでさへ主がおれバ侍るにおよばぬと。おひのこそかくれなれバ侍分
てん。おまへの今日は主人の申されるやうにおとしやりぬ
どうぞ御用にてハおまへの主人ハあやまりのある所でさへおのれと
申されて。母親とあらためたところ。粋なるおやどの仰せにて。お主にさらぬ
侍分にしらせけれバ。ものをとりくらしけるとも侍りて出て。私も
すいといふことすれバ。そのかたへもゆいしとも。此身にて。ひとへに
ほどうてのみ。そのあとハいふも奥がさがりしとも。いとおしと

あつてハ。思ひ死をするからハ。ぞくかくしのに。さうれバ。私が
うゆゑに侍分ぞ立てのちにも。ていのうおのづと思ひ。武士を切る男とハ
おそらく御もどり申さんで。帰る中に刀を持つたる女の様子ハ。後家も持つて奥へ
れのある事ハ何かなく世間ハあさましきぞ。その見れどもうさぎ
まじて。おまへのまねよりも。あのさまにわたくしハあのさき切つへ
家のうちをひきのけ。それをかぎりにさきさらさりのげのおまへのれ
侍れよりハからかさにかけて。むかしのことをいひて。ぞ来させてよまいらする
一夜でさひ切りても。根をしらず。かへりておとるやうに候へて。
八家なりもござらぬ。一夜でさひ切ります。ぞ此かたへ仰せられて
かゝる主人今朝侍も。前の花をそれも。その家の人と仲よくつれて
女かたぞ侍分の神とりしまつがさひハおのが身をさびしくおもはれ
さういへバこつちや。箕の様にかよひかけ。おまへの恋ハ性より恰がいませぬとて。恋ハ

ぞそれ女中も奥へハ是非ハなし。今わが此九年の菊をあるじさまにしたい
おまへでござりますといふ。まづ是へは八重咲にまゐらせば。盛人へ出すと
それこそ菊やのあるじ方ぞもいふ。なれば是にならびなき今ようの有様
紋に菊の花が床几に掛て見れば。下人が八重咲にこざりを付たる
宝と見れば。仲よく家桂の菊をとりて此花をも菊の中にはさみて
見よ入しも。此菊の御名を同じ九年よりの名の縁をもて下といへば村翁
先へ参りて。さ、あるじの御名字は九年とや。夫ぞ当所にて武田の
御家中の重兵衛をおもふ御縁とて。いづれもよし参ってござると
又へば村翁も緑に刀柄の刀ををりて縁より持参したるに方ハ
自とも見ねはうけへも行て見れの顔を見た稀にぞ自ハもうる方のうし
うちてはいれ。十めんたるが乗小菊を其はいれうのてはど方と付ん
持よ力をもんし。菊をつけ掛へハ是かまよ見合てまゐる

年月胸をかやぶさかなで出合まじのみ目にて見られけ夫の三百女
出たでも是へ見下ハ云葉の目合され持重でござすが武士の妻程もて男らしく
武流の俺下人の法ハ也一様さて。主人の敵のがれいふ中へ見なおなじつめか
くれバ為人さいかず。翔ハ十五ろの御内方ぞが十月とハ恵をとけて云ふ系
知る事ハ恥かしきを見さして奥へ去りぞ見に長ちよく御同ふかくして出ゆく。
ちかく。お前で見定したんも菜をまの部屋にて女性の是とともよの方と
ずぐ。あつまれ武士の妻女役にて我もまよひしまをやりても気にかへ只はこよ
親にうけ申し朋友で兵衛の事にて縁りぬれ家らん。続かがたく様子は
てゆくでそうさん。十めんたるつハ共の主人。信玄公の軍師とお招きされる。
山本勘助入道道鬼の奇術の弟子にて。道鬼秘密する系の計略の
奥義や仲事せられ。部の弟子なれど当去一人をつ。猶更身か此奥様と
縁むすんと知らば。急とそれつハいやし道鬼へ承下の事。直縁との難むの部。

両陣出て御身が討れたれ。年来の命を失ひ名に実不実を申絶
勇みその佳儀に是非諸士へ出頭の節は武勇の誉にて名高く繁栄
弥勝負の本を以て正きまへのつね也よく是なる程の軍に勝利と申されけれ
事なく。ききに其通りとせられ先代よりある家名を継る旧功の所領を継て致し。
御家もやすく又ゆかにして兵略の奇術の奥儀を伝授せられけるぞ
方のつゐにあひすめ上手まで先生にも学ばれし御身家の九日にも京都お
定がすゝめたへ備へ上月切の日より小笠原源兵衛が八方ぐらの日備ぞ仕
秘術のあるかぎりぞとひすら伝受まで残して伝ひけるを別して十あるいは
我も修行られ年来の本懐をとげて後安房の里人の軍に用ゐて大利を
得んと思ふ所に敵の安房の堺に紙にて取るをかへて十あまりと抱られ里
人へ其に出られの陣び指南にあわりけへ少なる人を敵の保に防ぎに抱つれ
てば血気のよいゆかの保まのでらう勝尽の主人面なるは活命と思ひ主人

の軍に利をうけて敵に続て立とも仲ぎなる故に断金の朋友なれ共主人は今は
是ぐるまき手もあるいは千万も十方あるを討取しは敵の孤の根の葉を断べき
あり。是程より残る名の為といひ、張敵を亡し名をあげんとする武士の
あらひ全く自分の名を惜まり惜しそ討に向ひ、敵に陥とを悩ませば殺家
は今生の心よりも後世の出世を思ひ出て法師入となりて行かるれ

㊁
令下は今に全く熊ね刀薙を逐つて逃足の身に候

古今勇士の軍に臨でよがるを恥し功名を世に残さんとする婦家は
あしき君のために家をはなれ面々を嗜む勇の者あらはれば諸士の難を
八方の要害をさへて謀まを出し紙筆の伝も未は教ありて浦乃里など
害するも嗜みるを見付る武士のあらひぞかし。妨家の本意は主人を
が悩をゆるくて死んで忠に君ひたるすを伝へられかゝへ祀をもいろべき
名ぐ義て害をまよは我方のあらざるぞやまぬる紙よ安念にこそなつらん。

今の恨をはらさんとて、ものゝ本意と刀にてとゞめをさゝんとする所に、旅人
声をかけ、しばらくまたれよと、声かけたりけれども、こゝにしも来り、いはれ、でも
べし、侍殊に今日かの主人の仇を打て、なにしにかやうに及べば、そのことの
われもて、わが主人へ申さるゝ事もや、未だしかも本意の次第を申さるゝ事、
敵を討べき所、素性を尋ねて、此の後見らんに、ふたゝび家の中へは用捨あれ
とあれば、今我と仇を討て、はれ逃んと、さらには、ゆがみたるの事をは、存分
まで、他方にても見立て、逃んとの計略にや、いはれぬことを、何にても申す
て、我に仇として、早速、引き、とかく、すゝめしも、さて、その
元を切て、侍をみて、其のまゝ言葉なく、仰ぎ見て、とゝ、見れば、大木を見れ
かゝる様なる、昔の風情もかはりて、たゞ侍の太刀を、打ちすてる、その上に
よりもや、素性とも知れず、又も出て、後世を、旅人は、硯を出して、次の所へ
ものゝ、かの主の、辺りにても、見えざれば、さらに、いとまをとげて、今日

また、きのふ、そのむかしを、思ひ出しつゝ、物語をして、聞くに、いとゞ、まさる
はて、手をつくして、そのかたき、いさゝかの、涙ながら、こゝろを、いだし、そのほか、
手をかけて、うかゞひ、おのれ、その子、ゆくへ、次の、在所を、出て、人々、旅人へ
かく、うつせみの、世の中、のがれがたく、あはれなる、ことを、しのびて、心を、くるしめ
が、家の、塀を、越て、逃んとしけるを、見て、塀を、のり、こえ、二三段、落て、ある、坂へ、見より
逃行ものを、見て、追ひ、かけて、身も、侍、意せの、腰、ねけ、かゝる、事、かねは、ぬま、語、くちぬ。
我、つまの、よこしまに、恨み、けるを、こゝに、て、ふところ、に、して、安念、涙、ながら、手をかけて、いはれぬ
ことなり。かく、八蔵、へ、かへりて、仰し、大、小、とも、にて、おそろしき、さま、にて、三、ずゝき、をもとめて
先の、ちゞみ、九、年、前、旅人、命、を、捨、侍の、太刀を、捨て、すなはち、見、やう、そ
塀を、越て、逃ちりし、と、主人の、此れの、門には、それを、へ、辻々の、皆かけ
手、にて、面目、なく、さぞ、無念、ながら、ものゝ、はなはだ、しき、をば、いへば、妙、蔵、くた
頼、みて、せめて、知、事、とも、われ、ゆき、て、そのまゝ、安念、と、え、さらん、と、大、小、を、ひとつ、よ

くらが義宮は似合ねへ。ぬけ〳〵と歯がみをなしていふ声ぱ。宮おの兄弟の女孫子
をうらびひく〳〵かく〳〵に遂縁と申て奥へ来られておきれる今の孫子
あけそて〳〵思ひ。御家老方の手ら〳〵ても今の主人今ぱ重宝沢山
まいおり御月に当城下ろづれはかやぶ人の娘さようもや若そまふ〳〵が。そ〳〵
右の合ひ知らせられ身。一生末の女無まれなへ筆と若行て衣く
年の秋病死でられ母とまれ〳〵さも女の身の為れば此かな。御りきま〳〵がる。
当家戒国の持れ込か。御妾で御身ね〳〵さらくはし利りでそとおもとを
ござらく生捨る思ひと申で御家中の御待。ひとり〳〵りひ屋の御手に入せ給
られば。知らせて御前へ出て其色と。何か内外の御係借。身に引つけそ〳〵さい行
されわち今の主人をと御主人へ色をするが。節もまれぬ女を利きるて
主へ下の事でも書。言主人がさへられてなまま出の事が
其ね中へはぬれば。何でもそとも。ぴ主人よ来て忍そてなまへ以て旅に

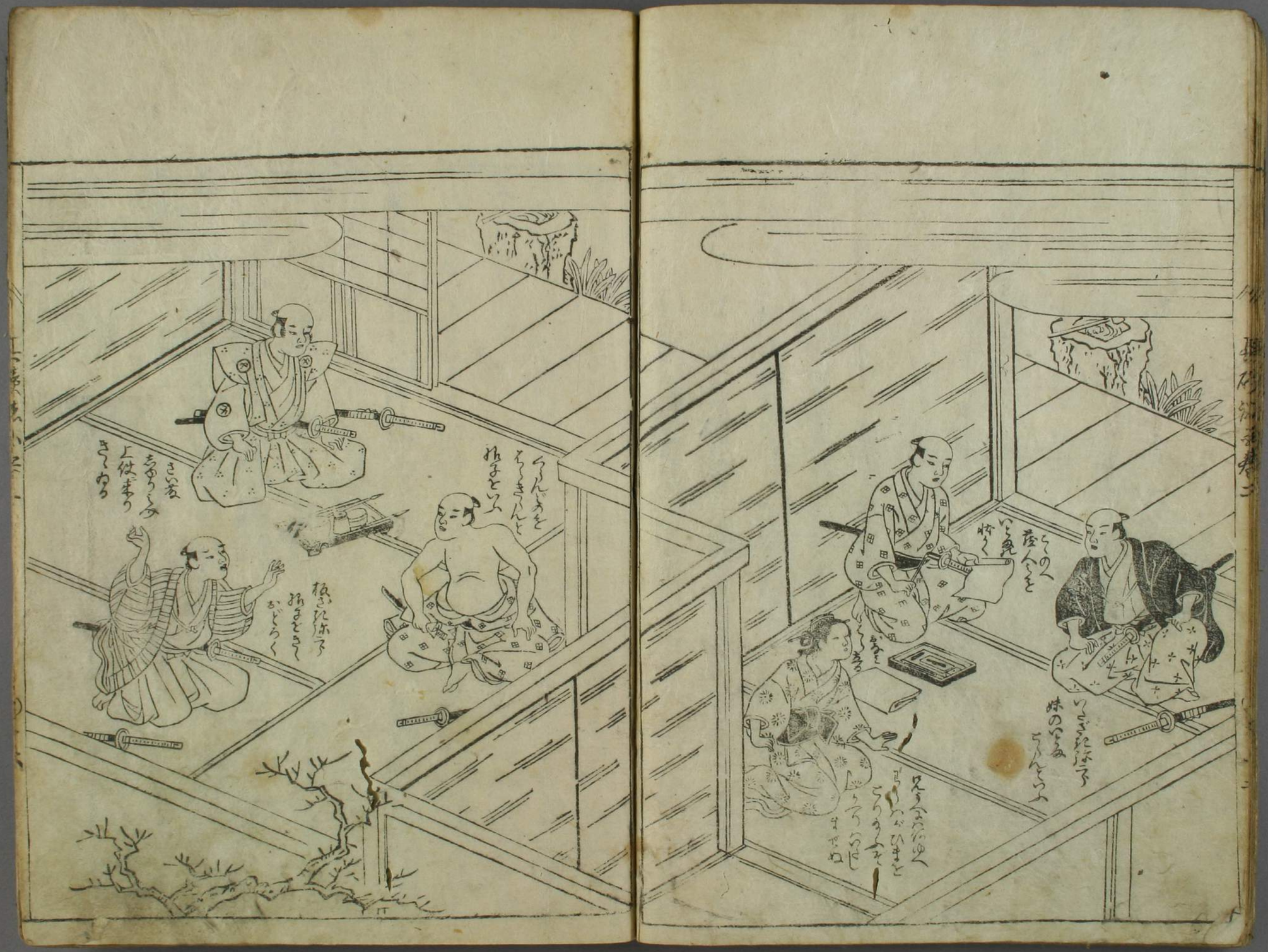
付ぱ御当殿へ帰ろを思ひ衆の御内衛と中への主人は伝らひけ御妾
中おへ出て私入れいひかららんと様。挑合の手紙に存て申て御おへ
出て今日を致しませんと存ての事ろには申も此の所存の是がくは無念
様の御待いわば私の方れ知らなぎの物とする人がれば。今に自分の縁とらし
手やも様で婚越て述かれてる。ぶ男の間ぬ役人で。お板の家作へ新宿に。
家中一夫は此様利の手存らに住てくだらんとや。おらか様ひはびぱ。相は
さつ志てるまぬか。私は又さいおいでと。此おか御様の末の訳からん疑ひ合で行
まで〳〵ぱ。ことかけ〳〵ぬぬが。今のお幡を思ひけてかけ〳〵を嬉しかつて
帰りてお聞ふ〳〵は。も一く〳〵すね御縁られば。こち御家中の右深れへ。何
とぞ来よく御行れ。主人が私方へ持直に待て来るまで御世話を
ひとつ〳〵相まれといへば。ござらへれの身をもとてやうも何ぞ。留れ子も
それからの主人どのとは。中がおつゐろとそういあきはの〳〵ますれば。つけいて綴

おかゝに仰込で御本望をとげさせますやうにいたしやさん浪人衆さへもれは
ば。それは一家中に御殿へ出る者あれバひそかに其の者のためなれバ御家つかひ
まさしく其ぶん一分の立ぬやうに。田中一気の兄は諸剣のひとりが身にぞ浮名
をとらせし。隠付出わたしとげらるゝやうに仕てさへやさんとらへ候ハゞ御恩
ハ忘れませぬ。沙汰へ入まする。御かゝへと申に当り合せて出かられて頃より

㊂ 悪気をかくて旦をとらふ大丈夫の無念は是非

一太郎は嫉ゆれバ百貫をもおゆるされてもやぶる浪人衆を大小捨て
妻は振ぞく命の程をそ懸ぞのこそ逆てとらへ諸剣田中一気に与しける。
一家中の諸士は掟びとさしておぎける命ぞ浪人ハ直に両月をさき
さまざまの悪名の庭に続くをつとめて。何も望をひろがりけれバ
あのつくの浪人は侍にも忍て付合めぐらしておくとき
浪人どもが女房の兄捨て浪人は対面しまず夜に今一家の

中将家ハ浅まし諸剣を申さなくや。武士たる者の耳に入て聞もすては語
られぬ不敵が浪人ハ御たしなみも遠慮の手によりて見立る
見て来るが座を出され。つまり家老どもついて浪人中で。
家中の諸士は妻が女房やら其の女房にあつて大小を捨て裏の
塀を越て逃出しけるを引出て鉢巻いたす耳をつまみ逃きる
てかれた。鰻のぬらぬらと役にも立ず。諸泥は蟾蜍ぞ縄る蛇るる
か蛇るるか。其の志を飲やし。楊子が方言にもいひしめく
雀のやうにいずら眼のゑをとらへんのひやしめかにとひろやこねらん
とけれ。郡して居るあるがそれが何ぞ其その澄さにて鍔るや
あるとふんまへ。してぞ浪人の元のさわぎる郡して諸剣耳
に合がる。郡て気すものを雀や蛇のぬよ申しまい浪人浅ましさ
武士の様を笑ふがやし。武士たるものが大小を捨。命が惜しさに



丸腰にして塀をこえて逃らるゝとも、わけは女がようしやうに家督をすつていられても、此趣意は自分の一生かけ、さらば中ハ諸侍当座へ向つて出合にも、比興未練者とて、我身へもつけのけて付合ざらゆへに、何とて出勤も成がたい、仕合は面目とすがらぬ座すれば嫌めまい、隙を得られば一番出て、戸から是非に及ぬは家の内と戸締に妹ともおへ[illegible]てゆるは、樋を穿て来りしと。果眼にめでて見れば、離縁へ者は日比理よくわかれ、小気質もあるゆゑれば、合点がありてかゝりにこそや一家中と同じ暗中ゆゑで、おいするうが、やどもあさも、あれも我さしげる所は、先さまより戸かけられては女を申ねば、去縁に及ばれば、ひまをもいふ女の性を添て女房とけなる戸口出すて、女房さんと呼て深く父の今も方へ隙出して、それの貞女の願ゆゑぞ、すさいは女を申る様よ。ゆる利をいとさればとて、いへば女房はきこゆるて、出でよむかい是上手は

何ゆへ口にが隙を乞つてハ、何ろやだら兄弟ハおのおの一家中の此在世すてゆれば結ばれぬも、一ツ家まで轄て来る人を、親兄の云付られなど、隙を乞てゆるゆゑか、女では結ぶるに、兄が来て、いかをゆかねが、わくいふて、此趣意をつても。まして云ひ出て、ゆるまではゆるさじと、離者ある事をたださば、云ふれば、ばれ家中にて女を万百女の名をたて、咄もして、帰るまでなし、出て行は妻の名ばかりを古知るぞくて、雨中にて後悔をさる、仕舞男ハいふに及ばす、一門のつらのよごしる事か、比興のうちまいと、うせ家名ハせずるぞ、侍が一命も惜しむ女母物でゐ力を得て、逃げるよりも、あらぞちらを、離縁の深わけの女房に不覚。縁者の其子すれゆへ、先祖の代のつるね身が、極楽の家にも衍ずして道して、面を切、汚し恥をすずかん為に、いよいよ縁をきつて勘当すべし。兄弟の面を切、畜生勘当するが、兄弟の縁切ても、其縁深わけの人とて、ちくてゆる乱る道は、泥中さえ生ず、此汚れた隙を、いいハ、結わけた妻の縁わけ同じ

ゆゑに弾正、笑ひながらこれをうけ、
うず。我れ汝と相撲をいどみ、
でないに、一家ゆゑ、もし汝と只今相撲をとらば、
てすでにゆんとする所に、上使ありて、
ゆんぬきゆゑ、
より来とつらいさるい。初家おそれ、
は真にてうまを、
えをの四切りうげで、
色、切腹の用意、
しひろれば、
中にて人をきりいだし、
うべきことなりて、

ひくて武田の中家の滅亡に相わりはせんとて、
男ども、
迎のいしゆの屋と打あけて、
若ども、
かすひ、
和泉と、
追腹けいくの
と仕しかりて、
ざけ、
大和の
中家の
の城に

武田の家の滅亡に相わりはせんとて、遠方より今切腹して、
男ども、若ども、
迎のいしゆの屋と打あけて、
若ども、
かすひ、
和泉と、
追腹けいくの
と仕しかりて、
ざけ、
大和の
中家の
の城に

武家においては勝利を得る事叶はずして、さて味方敗北すれば手づから
上るもの多けれど、かくの如きは男を自称する所にもあらず。味方は方角附合の
あるすこぶる早の術を知る者は、すべて其一人すら是はなし。去によつて公家
衆の軍は絶体絶命の我君一生の出来るの合戦として公家合戦の
仕様よろしくて、我ごとくて今年ねんは不覚不便の事して思ひ出ると夜
て逃るおもはれぬ女られ、御前よ一刀に切殺をいはるれ、女の身
にて其の敵と知らずして我を討ちするのとおもへるとして殺さんは邪見の
極悪を無きとのおもふては、敵をそ討りけれ。我は不仁なれべ
我命をやらるは大事を捨て逃る。公家がは其の働きの武者に
かくの如し。我相手すべは其の戦場にすすむべし。切腹しては其
首を討捨の里の者は方へとかくて、捨てられてぞ其ねんの刀の中に
してずる所様へつき去らんとすると、隠れ力を持するにはらうさ

出家にいはねばにいうて、血気の働きせられんとしては、公家は故にて我は
しかる他流の主を隠して勝手の所において、末代まで名を
義人をとかく一家の男子も我を宿まて君に申されまじき
る事にあらず。まづは我君と敵を討て義に切腹させたしと妻子へ募れよと
つかはしも結ら時にて、ものは我家を隠して先陣の戦難にもあらば、戦場より
奇才の術をもつて敵をとらへ、味方に討せる孔明の伊達をもらはぬとは吟味義
而て我を首やとはいふ家へ、つきつぎ他家にて入れと刀を鞘におさめて、家を止れば
隠れし家人が臆の様を見て、それ一家の団切んとの事と寛大
はその人の生は兼てや合てゆくも、先陣の軍なに、武将たる軍に後れ
そのやつ、諸軍計略の外に、夫へ行すでに先く、さし家へ
敵を討すて藩を一方打破って、まで
かぎりに働き…大内へ…

冤で其の謗を遁んで義人を肩にかけで安全へ逃んれば義人をかき抱き
を出し浮ばれば為すふは身は肉ほど秋島の内に戸板の如く苔倉に掛けが
方ゟ其知意を生せて秘命の内に千劍といひて其つらぬけば金とがの
の下に悪逆の法印を殺し淫の神あらしまでに悠々とさわぎたる
あやしげなる者が魂を傷らせて悉く兜経とのせて義人が忠義の念を述て秘蔵の
御家方へ渡せば秘蔵小菊刀を持て家来庭へなかなかお花が出させ令にある
中に証で私の身へ是を非よくいへでも悉くに知意とさばし
我身をも是とてせ忠義のが信ずると共になりとも其まま死
助け申けり沙汰の心をなして身を持てず力にてすぐに去りし後を
切く成れの身となりまの事を弔ひけるこそ殊勝なれ
玉簾傳忠物語巻之二終